源氏日報

歴史講座

初回

坂本龍馬

一部変更して

今回は、坂本龍馬と福井の繋がりについて、急遽、深堀りします。

坂本龍馬が勝海舟の弟子だったことは有名ですが、なぜ、土佐藩の下級武士の出身であった龍馬が幕府の中心人物であった勝海舟の弟子になれた陰には、福井藩、そして「松平春嶽」が深くかかわっているのです。

松平春嶽は第16代福井藩主として、橋本左内や三岡八郎のちの由利公正など身分にとらわれずに優秀な人材を登用し、多額の借金を抱えていた藩の立て直しをした人物で、土佐藩の山内豊信、薩摩藩の島津斉彬、宇和島藩の伊達宗城と並んで幕末四賢侯と謳われた明君です。

徳川幕府の将軍継嗣問題などで井伊直弼と対立し、安政の大獄で謹慎、藩主を退いていますが、後に復権し、政事総裁職となり、幕府の重要人物となっていきます。

そんな中、文久2年（1862）閏8月頃、龍馬が春嶽との面会を求めて江戸の福井藩上屋敷を訪ねています。しかし、この時は春嶽に会うことは叶いませんでした。

その後、同年12月5日、龍馬は初の面談を果たし、春嶽へ大坂湾近海の海防策を論じ、親交を深めていき、この後、春嶽より紹介状を得て、勝海舟に弟子入りを果たしたという説があります。

龍馬は春嶽の他に、福井藩士とも幅広い人脈を築いていましたが、その中には、由利公正をはじめとして、山本龍次郎や中根雪江、村田氏寿など、明治新政府に出仕した人物が多くいます。

由利公正は特に龍馬と馬が合ったようで、福井に訪れた際には、足羽川近くの茑屋旅館にて、早朝から深夜まで延々と日本の将来を語り合ったと伝えられています。

1863年、勝海舟は、神戸に幕府の海軍の人材育成を行う海軍操練所を開設することを将軍家茂への直談判により許可を得ましたが、これに先立ち、私塾を開くことも許されました。これが操練所の前身となる神戸海軍塾です。

海舟は塾の資金調達のため龍馬を越前（福井）へ派遣、以前から親交のあった福井藩主松平春嶽から5千両を借りることに成功しています。

そんな福井藩に興味と期待を抱き、福井の地を幾度か訪れているのですが、龍馬は、特に経済の天才といわれた福井藩士・由利公正に惚れ込み、大政奉還の後、新政府の財政担当に由利を推薦したといわれています。

坂本龍馬は初めて福井を訪れた際に、福井藩の政治顧問である横井小楠から、由利公正に会うように勧められました。

そして、月明かりが照らす夜、足羽川の川べりにあった小楠宅から、ちょうど対岸にあった由利宅まで小舟で渡ったといわれています。酒を酌み交わしながら歓談。龍馬と公正は大変に気が合い、その後も長く親しい仲となっています。

大政奉還の後、すぐに坂本龍馬は福井に来ました。そして、自分が宿泊する旅館に由利公正を招いて、新国家の構想や日本の将来について語り合っています。

この会談は、朝から深夜まで続くほど大いに盛り上がったということです。この時、由利は龍馬に頼まれて、新政府の財政責任者を担うことを約束しています。

龍馬が京都・近江屋で暗殺される約2週間前の出来事でした。

日本で最初に新婚旅行に行ったと伝わっているのが、坂本龍馬です。寺田屋事件で負傷するも何とか助かった坂本龍馬は、3月から2人は湯治しながら仲睦まじく旅行を楽しんでいます。お龍は気が強く

奔放で、当時の男性からは敬遠されるタイプでしたが、坂本龍馬にとっては魅力的な女性だったと言われています。坂本龍馬・お龍夫妻の新婚旅行先の「塩浸温泉」や「高千穂峰」などは有名で、今も歴女達の訪問が絶えないそうです。

妻となったお龍は、青蓮院宮に仕える医師の長女として生まれましたが、まだ幼少の頃に安政の大獄で父が獄死し、一家は離散。母と幼い兄弟を養うため、料理屋で働くなど各地を転々とする中で龍馬と出会っています。自由奔放な性格を龍馬に気に入られ恋仲となり、その後龍馬によって寺田屋に預けられ、そこで奉公しながら暮らしていたのです。

寺田屋事件の際には、お龍は入浴中にも関わらず、裸で龍馬に危機を知らせ、窮地を救ったというエピソードは有名です。その後、二人は龍馬の湯治を兼ねて薩摩旅行へと旅立ちます。

そして、二人の出会いから龍馬が暗殺されるまで、わずか3年ほどのことでした。

お龍は移住した下関でお龍は龍馬の死を知りました。自分の頭髪を切って墓前に供え、泣き伏したといわれています。

龍馬の生前からの意思により、お龍は三吉慎蔵の自宅に引き取られた後、龍馬の故郷の坂本家に送り届けられましたが、まもなく京に戻ってしまいます。

このとき、龍馬から貰った多くの手紙は全て燃やしてしまったといいます。それからお龍は西郷隆盛や海援隊の人々等を頼って神奈川へ流れ、30歳のときに商人・西村松兵衛と「ツル」という名で再婚。横須賀で暮らしています。

幕末以前には封建社会の底辺に押し込められ、「女は三界に家なし」と言われ、君臨する男の陰に隠れてほとんど見えなかった女性たちの顔が、幕末期に入ってから少しずつ見えはじめてきました。勤皇志士たちを支えた女性たちは、今日でもその名前が数多く伝えられています。しかし、なんといっても志士たちと、命がけで彼らを支えた芸者たちとのロマンスが一番興味をひくのか、時代映画やテレビドラマでもたびたび取り上げられてきました。

坂本龍馬の危機を救ったお龍。高杉晋作と逃避行をしたおうの。そして、桂小五郎の亡命を助けた幾松。

幾松こと松は若狭小浜藩士木崎市兵衛の娘に生まれたましたが、生活苦のため一家は離散、三本木の置屋の養女となって芸者稼業に入り、14歳で二代目「幾松」を継いだ彼女は、やがて長州藩の桂小五郎を知り恋に陥ちます。

「禁門の変」で窮地に陥った小五郎をかくまい、幕吏の追求にも臆せず、毅然としていたために、追っ手もついに小五郎の探索を諦めたといいます。徳川幕府が磐石であった時代には、武士と芸者の結婚などあり得なかったが、小五郎の意識にはもう維新前から、身分の違いなどなくなっていたのだと思います。木戸だけでなく、伊藤博文の妻梅子も元は芸者であり、維新の政治家たちで芸者を正妻に迎えた者は多く、波乱の時代に育まれた愛は強し！です。

龍馬から、ついつい小浜へと話題が移ってしまいました。

まだまだ、私たちの知らない福井と偉人達の繋がりは沢山あります。

昨年は浅井３姉妹に始まり、

・一休さん、
・３姉妹の深掘り、
・結城秀康、
・松平春嶽と橋本左内、
・そして由利公正をお話しさせて頂きましたが、

今年は古の闇を照らした陰陽師に時間軸と空間軸の操作を委ねたため、次回がどの時代に旅行するのかが謎です。できれば平安時代に軸足を置いて時間旅行をしたいと思います。